

ナイチンゲール看護論の「自然法則」をどう理解するか ——看護者が「本当の仕事」をするために

守屋 治代 Haruyo MORIYA

1. はじめに

ナイチンゲール (Florence Nightingale 1820-1910) 看護論は、欧米の看護研究において「古典」としての価値は確立されているもののそれ以上の発展をみることがなかったのに対し、日本においては違った受容がなされてきた¹。それは、ナイチンゲール看護論において「自然の働き」が強調され、日本の看護者の精神性との間に高い親和性があったからであろう。ナイチンゲールのいう「自然の働き」を人間が本来もっている自然治癒力と読み替えることにより、その働きを引き出すという発想を自然治癒力に表れるような東洋的自然観と重ねることができる。またそのような自然治癒力が発揮されるには、その人が置かれている場・環境を整えることが大切なのだという観点をもつことから、看護理論研究者から環境論的看護論と評価されることもある²。

確かにナイチンゲール看護論には、“Nature”がその根底で厳として息づいている。例えば、「病院の看護と健康を守る看護」(1893)と題された論文では、「癒そうとしているのは自然であり、私たちは自然の働きを助けなければならない」³とし、看護者は「身体と世界との関係について神が定めた法則」「神の法則—命の法則 the laws of God – the laws of life」を学ぶようにと述べている⁴。

ここからわかるように、ナイチンゲール看護論における“Nature”を簡単に東洋的自然観と重ねられるかどうかは、ナイチンゲールの宗教観にまで立ち入った吟味が必要である。ナイチンゲール看護論はキリスト教思想を背景にしているが、そこにはナイチンゲール独特の宗教観がみられる。そこから語られる“Nature”はどのようにして看護者の具体的実践行為へと接続されるのだろうか。本論では、ナイチンゲール看護論を基盤づけている“Nature”と“the laws”が意味するところを探ってみたい。

ところでナイチンゲールには神秘主義的宗教観がみられる。アントワヌ・フェーヴルは近代西洋の様々な立場の神秘主義的思考形態に共通することとして、「コレスポンドンス (照応)」と「生きている自然」という基本的要素をあげている⁵。まず「コレスポندان

¹ 欧米の看護研究者がナイチンゲール看護論から多くの刺激を受けていることは確かだが、ナイチンゲール看護論そのものを継承・発展させているわけではない。それに対し日本においては、例えば薄井坦子や金井一薫らがナイチンゲール看護論を実質的内容とした実践方法論までを展開させ、大学教育においても取り入れている。

² アン・マリナー・トメイ、マーサ・レイラ・アリグッド編 (都留伸子監訳) 『看護理論家とその業績 第3版』医学書院、2004年、73頁

³ 『ナイチンゲール著作集 第二巻』現代社、97頁。なお、“Nature”と日本語の「自然」を対応させる翻訳の問題については、既に柳父章『翻訳の思想 「自然」とNATURE』(平凡社、1977年)の仕事があるが、ここではそこまで立ち入らない。ナイチンゲールの“Nature”は、文脈に応じてNatureまたは「自然」と表記する。

⁴ 同上、133頁

⁵ アントワヌ・フェーヴル (田中義廣訳) 『エゾテリスム思想 西洋隠秘学の系譜』白水社、1995

ス」とは、例えば惑星と人体の各部、性格、社会とのあいだにみられる対応関係のような、可視世界、不可視世界のあらゆる部分のあいだの象徴的・現実的な類比的対応関係をいう。これらのコレスポンドは一旦見ただけでは覆い隠されており、人間が解読しなければならない。また「生きている自然」とは、複雑で多層的なコスモスにおいて最も重要な位置を占める「自然」が様々な潜在的啓示に満ちていることを意味している。そのように生きているものとして自然を見、認識し、体験し、「神—人—自然」の関係を探究する必要があるというわけである。

本論では、ナイチンゲールの看護論から以上に見られるような神秘主義的宗教観の背景を消してしまうことなく“Nature”と“the laws”を解釈してみようと思う。ナイチンゲールが記述する看護実践の内容はきわめて現実的であり具体性に富んでいる。そしてまさにそこが神秘性に直結する。ナイチンゲール看護論は、この現実性と神秘性が相即する看護論として解釈したときに初めて、その奥深さに近づけるのではないか、というのがさしあたっての予測である。

2. ナイチンゲールの宗教的立場

1) 行動的神秘主義

まずは、ナイチンゲールの宗教的立場を確認しておく。ナイチンゲールは、看護や公衆衛生、病院建設・運営などの社会改革の仕事に入る前に、語学に堪能で知識人であった父親の薫陶を受け、歴史、哲学、フランス語、イタリア語、ドイツ語、ラテン語、古典ギリシャ語、化学、地理学、天文学、統計学といった諸学問を身につけていた。父親はユニテリアン（イエス・キリストの神性を認めない宗派）であり、娘であるフローレンスは洗礼こそ英国国教会（聖公会）でうけているものの、一つの宗派の枠におさまらない自由主義的な考え方をもっていた。当時のローマ・カトリック、英国国教会、プロテスタント等の教理や神学的論争にまで及ぶ批判的考えが述べられているのが『真理の探究』である⁶。ここにはナイチンゲールの独特な宗教哲学が述べられている。

真理を求めるナイチンゲールの内面は、当初プラトンの形而上学に強く惹かれ翻訳にも携わるほどその世界観の影響を受けている。その後プラトン研究からキリスト教神秘主義に深い関心を寄せるようになり、さらにドイツ神学、東洋の宗教伝統、グノーシス主義、ヘルメス文書にも精通するようになっていった。そのなかで取りかかった中世神秘主義者の著作からの抜粋集の企画（『真理の探究』とは別の書物）の序文で、ナイチンゲールは神秘主義と霊的生活について次のように記している。ナイチンゲール 53 歳のときである⁷。

年、17-19 頁

⁶ ナイチンゲールは“Suggestions for Thought to Searchers after Religious Truth”を 30 代で書き始め、40 才の時私家版印刷をしたが公には発行しなかった。M.D.カラブリア他編（小林章夫監訳）『真理の探究—抜粋と注解—』（うぶすな書院、2005 年）は、この書物全 3 巻が 1981 年にマイクロフィッシュとして発行されたものから一部を選び出し再構成し、解説と注釈を付したものである。なおナイチンゲール文献は、リン・マクドナルド編纂の“Collected Works of Florence Nightingale”全 16 巻が 2001 年から一般刊行され始め、一般研究者がナイチンゲール文献の全貌を手にすることが可能となった。

ところでナイチンゲールの生きた 19 世紀のイギリスは、宗教と科学の乖離により双方の批判論争が高まっている時代だった。ベーコン、ラプラス、ヒューム、コントラの論の後のミルの「自由論」、ダーウィンの「種の起源」等に代表される合理実証主義的科学思考、また宗教界内部での不協和音や論争、ドイツ神学の影響など複雑に錯綜した思想状況を読み解かなくてはならないが、筆者の力量を超えている。

⁷ この年、ナイチンゲールは神学的問題に関する 2 つの論文を誌上発表し、当該の『中世の信仰書

この本は、読む者を仕事のために備えをさせるという意味で読むときに、はじめて役立つだろう。生命を鼓舞し、仕事に力を吹きこむという二つの目的を実現しないなら、良書とはいえない。……

神秘主義とは何か？それは儀式や典礼によってではなく、心の姿勢によって神に近づこうとする試みではないのか。「神の国はあなたがたの中にある」という聖句を、少しばかり堅苦しく表現したものだろう。天国は場所でもない。時でもない。天国は単にここにあるだけではない。現に、いま、あるのである。……

宗教は信心ではなく、むしろ仕事であり、神を愛するがゆえに苦しむことである。——これこそが神秘主義者の信条である。……

私は神をどこに見出すのか。私はそれを私自身のうちに見出す。これが神秘主義の真の教義である。しかしそのとき私は、神が住まいとしてくださるような存在でなければならない。それこそ、神秘主義に基づく生活の目的でなければならない。あらゆる時代、あらゆる国々を貫く神秘主義の原則は、魂をそのような状態のうちに置くことである。つまり……魂が神に己を明け渡して神の意志にそれを委ねるのだということ……

神とともに働くということは理想をいだいて生きることである——理想について思い巡らすのではなく、そのために働き、そのために苦しむことである。……「神秘的」な状態こそ、良識の精髓なのである。⁸

ここにナイチンゲールの生涯にわたる仕事を貫く信条が集約されている。ナイチンゲールはこの書物を宗教的観想のために書こうとしたのではない。「仕事の備え」のために、神とともに働く仕事をするものとしてその魂を神と調和させるために書こうとした。ここからみられるナイチンゲールの神秘主義に恍惚感はない。むしろ彼女のそれは、徹底して此岸的であり具体的に行動する神秘主義である。「生命を鼓舞し、仕事に力を吹きこみ」「良識の精髓」といった表現に表れている行動的神秘主義⁹、あるいは積極的神秘主義¹⁰の立場である。ナイチンゲールにとって、神との経験の直接性や原初性——「現に、いま、ある」というリアリティ——が現実の行動の源となっていた。

ヴィクトリア朝の時代、看護は上流階級の子女の立場では考えも及ばなかったであろう召使の仕事として受けとめられていた。その看護者と教育の道を選び取ったことの根柢には、以上のようなナイチンゲールの内奥における神との原初的経験があった¹¹。その経験

からの抜粋集』の執筆をしている。抜粋集発刊の仕事はナイチンゲールの父親の死で中断し、結局発刊されなかった。

⁸ Sir Edward Cooks (中村妙子、友枝久美子訳)『ナイチンゲール その生涯と思想Ⅲ』時空出版、1994年、143-145頁。訳者によれば、クックはイギリスの著名なジャーナリストで、デイリー・ニューズ紙の主筆だった人物である。1913年が初版であるので、ナイチンゲールの没後3年で書かれた同時代人による緻密な伝記である。同時代人としての深い理解と第一次資料の豊富、適切な使用が強みだと評価している。なお本書は全3巻構成である。

⁹ ここでは宗教学の正確な定義に基づいて使っているわけではないことを断っておく。

¹⁰ 「積極的神秘主義」という言葉は以下の論文から引用した。小林恭「ナイチンゲールの積極的神秘主義と看護論における「三重の関心」——ケアの人間学の原点のために——」上田閑照監修『人間であること』燈影社、2006年、74-100頁

¹¹ 自身の自伝的文章によれば、ナイチンゲールが最初に召命の実感をもったのは1837年2月7日(17歳)、さらに内省の能力が強まるに比例して召命の意識はつのがつていき、1852年5月7日(32歳)に「世の苦しみを救え」という神の声をはっきり意識した。(『ナイチンゲール その生涯と

の自覚が神とともに働き理想をいだき苦しむ道として、ナイチンゲールに看護の道を選び取らせた。従って、ナイチンゲールにとっては日常的看護行為が宗教的行為であり神への行為であった。

ところで、ここでいわれる「神秘的」な状態こそ良識の精髓だとは、どのようなことをいうのだろうか。次にこの点について詳しく考えてみたい。

2) 「神秘的こそ良識」

(1) 心の姿勢とその具現化

神秘主義における絶対的なものに直接ふれる経験そのものの自覚は、主体を根源的自由のうちにおく¹²。その精神の自由の立場は自己と絶対者間における誠を求める。その目は外見に惑わされることなく真偽を見抜く。だからナイチンゲールは宗教的行為を次のように定義する。

下水の掃除をしてコレラを予防することは宗教的な行為です。しかし、(神頼みという意味での) 祈りは、宗教的行為とはいえません。その違いを生むのは職業ではなく、精神です。主教の選出は最も世俗的な事柄かもしれません。それが宗教的な行為となるか否かは、一人一人が義務として、また厳粛な責任として自らの役割を果たす限り、その選挙は宗教的なのです。問題は、神とともに行うか、神が不在のまま行うかです。

13

精神の清らかな自由が、このような鮮烈な言葉となる。同時にナイチンゲールの神秘主義にとって、その神と個人との関係は外に現わされるものでなければならなかった。

神が私にこれまで与えて下さった二つの願いのうちの一つは、女性を『主のはしため』となすためにこの神秘的な宗教をほかの人々、とくに女性に理解できるような形のうちに注ぎこむということ、もう一つは女性が『主のはしため』となれるような訓練の組織をつくらうということでした(……病院と看護——衛生面の配慮と適切な看護がとくに女性の奉仕を求めていたのです)。それは思慮深い女性たちを惹きつけましたし、宗教心のある女性たちに行動の形を与えました。……私が願ったのは、病院を組織化することでなく宗教を組織化することだったのです……。¹⁴

「病院を組織化すること」ではなく「宗教を組織化すること」。ここからわかるように、ナイチンゲールは、当時社会的な働き場を与えられていない女性とその宗教心を外に具体的に表現するものとしての働き場を求めていた。心の内なる宗教心は外へ、すなわち現実の生において表現される場が必要だった。一方で病院は目に見える外的な形や制度であり、ナイチンゲールにとってそこは宗教的行為によって満たされなければ意味がなかった。

ナイチンゲールにとっては内と外の一一致、すなわち神へ向かう道と同時に現実の世で働

思想Ⅰ』、1995年、31頁、67頁)

¹² 上田閑照『哲学コレクションⅣ 非神秘主義——禅とエックハルト』岩波書店、2008年、131頁

¹³ 『真理の探究』、329頁。この文章は、シエナの聖カタリナの残した言葉を基にしているようである(『ナイチンゲール その生涯と思想Ⅲ』、151頁)。

¹⁴ 『ナイチンゲール その生涯と思想Ⅲ』、315頁

く道が看護の仕事だったのだ。内奥における神との一致はその直下で具体的行為へと現れ出るものであったから、宗教の本質を生活において具現化することが重要であった。その具体性は日常のありとあらゆることに徹底していた。長くなるが、以下の文章がそれを示している。

かつて、偉大な改革者で、日々の生活を省みた人物は一人もいない。ウェズリーが説教をすると——彼はどれほど熱心な改革者であったことでしょうか——人々は彼の説教に喜んで聞き入りました。しかし彼は人々に、「洗濯をしている間も神の御旨に従うことができますか」と言ったのでしょうか。洗濯も、アイロンかけも、家を建てることも必要ですし、大地も耕さねばなりません。私たちには、食べ物も飲み物も雨風を避ける住居も必要です。私たちを神の目的から切り離さず、神の目的に一致させるために、これらの仕事はどうしたら正しく行えるか。……私たちは食物を山ほどテーブルに並べますが、その食物の健全性にまったく何の配慮もしていません。神の業を行うために、何が一番私たちに力とエネルギーを与えてくれるのか、何の目算もありません。……衣服についても、仕事についても。……仕事に従事しているときは、もっと神とともにいなければならないはずです。¹⁵

この延長に看護の仕事が位置づけられる。すなわち、「看護とは、新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさなどを適切に整え、これらを活かして用いること、また食事内容を適切に選択し適切に与えること——こういったことのすべてを、患者の生命力の消耗を最小にするように整えること」¹⁶。ナイチンゲールの神秘主義的看護は、このように日常生活の細々としながらも確かな要素のなかで最もその具体的姿が現れてくる。

(2) 能動性と受動性

以上のような「日常の具体的な仕事に従事しているときこそ最も神とともにいる」という働きのなかで、人はその都度の具体的判断をどのように行っていくのだろうか。この点について、ナイチンゲールは次のようなメモを残している。信頼する友人であるプラトン研究者のベンジャミン・ジャウエットからの手紙の一部に、ナイチンゲール自身が下線を引いている。そこは、自分の行動と神の意志が一致している状態について次のように書かれている個所である。

物事をそのように（自分の行動と神の意志が一致しているという意識をつよくもっている）感じる時、かならず限らない平安とほとんど尽きることのない力が湧いてくるのです。……行動的な生活というものはまた同時に、神の御手のうちにあつて、また自然法則の達成において、受動的な生活ともなりうる……。¹⁷

ここでいわれている「自然法則の達成において」が意味することについてはあらためて後に検討するが、ここでは「法則 law」の語源とその範疇の変遷について簡単にふれておく。law は、lay という動詞の過去分詞系つまり受動態であり、能動者である神の手で「整えられた状態」を意味する。それが自然のなかでは法則となり社会においては法律となる。

¹⁵ 『真理の探究』、333-335 頁

¹⁶ F. ナイチンゲール（小林章夫、竹内喜 訳）『対訳 看護覚え書』うぶすな書院、1998 年、5 頁

¹⁷ 『ナイチンゲール その生涯と思想Ⅱ』、1994 年、387 頁、括弧内は引用者。

従って、自然法則すなわち宇宙を系統立てる原理とは神の意志の顕われであり、「自然法則の達成」とは神の意志との一致のうちに行動することを意味する。¹⁸

ここでいう法則の支配は、人間の自由意志と必然の問題にも発展する。これについてのナイチンゲールの考えは次のようである。

人間には法を意志する神の存在は理解しがたく、完全な存在者、神の本質を理解することはできず神秘のまま受けいれるべきことだ。しかし、世界のいたるところに見られる物理的現象、道徳的、知的現象のなかに、神の性質、普遍的な法のうちにならつくった存在の痕跡が見られる。これらをより深くより広く探究し、普遍的完全性への道を被造物が自ら学び、互いに教えあうようにという善なる全能者の人間への働きかけがそこにみられる。人間が自由意志を身につける唯一の道は、自分自身の意志を支配するすべを学び、人間自身がよしとする意志をもつ道、すなわち普遍的秩序・法をおのがものとする事だ。この普遍的法をある者は間違っって必然と呼んでいるのだ。

19

ナイチンゲールは自由意志と必然の間の戦いに、このような独自の整理をしていた。ナイチンゲールの自由意志は、神の御手のうちにありながら、同時に人間が自身の責任で自らを最高に発揮する自由をもつものとして考えられている。従って、単に人間的水準で出来事における何かを求めるのではなく、その事態のうちに神が何を求めているのか、何を示しているのかを訊ねること。それを根源的自由のうちに自身の意志の最高の責任において果たすこと。ここには、聴き取って従う、つまり受動性のうちに働きに出るという能動性が、同時にまた、働くという能動性のうちに聴従の受動性が内在している²⁰。

こうして冒頭で示したように「神秘的こそ良識」と言い得るのは、ナイチンゲールの神秘主義が、普遍的秩序・法をおのがものとするような私意を離れた根源的自由において、心を砕いて徹底して日常生活の具体的行為を果たすことを指しているからである。これこそ最高の「良識」といい得るであろう。

ここまで、ナイチンゲールの行動的神秘主義を基調とする宗教的立場をみてきたので、次にナイチンゲール看護論の原理ともいえる Nature と the laws を詳しく取り上げる。

3. ナイチンゲールの意味する法則、自然法則

1) 森羅万象のなかに見出される神の意志の顕われとしての法則

ナイチンゲールは、法則とは神の意志であることを次のように述べている。

神以外に原因はありません。他の一切は、神の法則、すなわち神の意志の結果です。……神の法則という言葉に私たちが込めているのは、神の意志という意味です。……神の本性或霊は、刻々と移り変わる時間の中で絶え間なく現れているのです。常に働

¹⁸ 近代自然科学においてはここから神の存在が消え自然観は一変するわけだが、ナイチンゲールは少なくともこの立場ではないことは明らかである。ナイチンゲールが Nature と the laws に言及する際に依拠しているのは、神の御手のうちにある自然法則であって、神から切り離された自然科学の法則性ではない。

¹⁹ 『ナイチンゲール その生涯と思想Ⅱ』、216-219 頁。なお文章中にあるような、被造物（自然）のうちにみられる神の存在の痕跡をどう見るのか、あるいはどう読むのかという問題は重大である。

²⁰ これを東洋的にいえば、自覚的に私意を離れて「事」のうちの「理」を訊ねること、「如法」に従うことを意味しているといえるのではないだろうか。

いている神の霊は、完全な智慧と善と正義と秩序と美と一致調和して常に現れ、無限の過去と未来とを現在の意志の中に包含し、完璧な充足と不断の活気に包まれて存在しています。……神の法則は、この宇宙の現在・過去・未来の森羅万象の中に現れています。²¹

法則は、あらゆる存在の中に、あらゆる種類の歴史の中に、脈々と引き継がれてきた世代の中に、彼らの見解や性質や行動の歴史の中に、たどることができます。²²

自然の法則のなかに、私たちは、人間の中に存在するのと同種の意志や目的を見いだすことができます。たとえば秩序への愛や、美への愛、そして安楽や安心や慰めを願う慈愛などです。²³

ナイチンゲールは、神以外の現象である森羅万象、あらゆる存在、あらゆる歴史、あらゆる思考や行動のなかに法則を見出すことができ、その法則は神の意志の顕われだとする。ただしこれは自然こそが神だといっているのでも、宇宙を神の法則のみが支配する場にしてしまうような単なる「唯理主義」²⁴を示しているのでもない。法則そのものは単に「普遍化であり事実の範疇にすぎず、何かの説明になっているわけではない」²⁵。

そうではなく、自然法則には神の意志が顕現しているのであり、そこから善と愛と智慧を読み取らなければならない。それは神の霊が常に現在に過去と未来を包摂して、完全な智慧と善と正義と秩序と美と一致調和のうちに働いているからである。従って、自然法則を追及することによって神の意志を知り人間の生きる道を見いだすことができる。そのために人間は森羅万象の中に宿るその「静かにささやく声」が聞けるように目覚め、教化されなければならない²⁶。

このような自然にある現実存在の日常的環境のうちで超越的なものに出会うという場合、現代の自然神学者の A.E.マクグラスが4つのアプローチを整理している²⁷。ナイチンゲールはそのうちの「自然のうちに超越的なものを見分ける」立場に含まれる。自然を超えたり、また自然を入り口としてその向こうを見たりするのではなく、自然そのものを見る。その場合、事物を見・観察する目、識別能力が問われることになるがこれについては後述する。

以上のようにナイチンゲールの自然法則観を自然神学の立場から解釈してみると、ここから受けとられるのは、人間との人格的な呼応関係に限定されない神の概念でさえある²⁸。

²¹ 『真理の探究』、138-140 頁

²² 『真理の探究』、162 頁

²³ 『真理の探究』、145 頁

²⁴ 『真理の探究』、142 頁

²⁵ 『真理の探究』、142 頁

²⁶ 『真理の探究』、156 頁

²⁷ A.E.マクグラス（芦名定道、杉岡良彦、濱崎雅孝訳）『「自然」を神学する キリスト教自然神学の新展開』教文館、2011年、第4章。4つのアプローチとは、1) 自然から超越的なものへと上昇すること、2) 自然を通じて超越的なものを見ること、3) 自然から人間の内面へと退くこと、4) 自然の内に超越的なものを見分けることをいう。マクグラスは、この4つ目のアプローチを万有在神論の立場と解釈できることを述べている。

²⁸ この場合、イエス・キリストにおいて人格的に人間と交わる神との人格的出会いが破壊されかねなくなる。これはキリスト教を否定するものであろうから慎重な解釈が必要だと思われる。

なおマクグラスによれば、18世紀初頭には「自然神学」という概念が、宗教的概念や前提に頼る

植物と動物たちの生態、大地や海や空の変化など観察可能な世界を貫いている法則そのものは、前述したように単に「事実の範疇にすぎず」、そこに埋め込まれている神の意志を洞察しなくてはならないのだった。ここでは読みとる者の見方が問われる。それは「神が意志しているように見る、神が見ているように見る」見方である。そのようなものとして自然を「見る」ことをナイチンゲールは重要視する。

では次に、そのような見方はどのように可能だろうかということについて検討する。

2) 内と外に遍く存在する神の霊によって law (真理) を見出す

ここまでのナイチンゲールの思想のなかに、神秘主義的思考形態に共通する「コレスポンドダンス (照応)」と「生きている自然」の発想を読みとることができた。フェーヴルは、前述した神秘主義的思考形態に共通する要素としてさらに「想像力と媒体」を挙げている²⁹。フェーヴルによれば、コレスポンドダンスの理論を実地に移すこと、神的世界と自然を仲介する霊的存在を発見して、見て、知ること、これを可能にするのは想像力だとしている。想像力とは魂の一種の器官であり、これによって人間は仲介となる世界——例えばアンリ・コルバンの〈想像的世界〉³⁰——との認識論的、視覚的關係をもつことができる。この思想は「ヘルメス文書」の影響によるところが大きいという。ところでナイチンゲールは古代エジプトの宗教にもかなり精通しており、まさにこのヘルメス文書にも詳しく³¹。

前述の「森羅万象の中に宿るその「静かにささやく声」が聞けるように目覚め教化される」ように、つまり「照応」と「生きている自然」から霊的存在によって神を見いだすようにという促しは、さらに次のように続く。

神の思考、神の感情、神の目的を探しなさい。一言でいえば、神の霊は、あなたの前にも後にも、遍く存在しているのです。あなたの本当の仕事を行いなさい。そうすれば、あなた自身の内に神の存在を発見するでしょう。すなわち、あなたが発見するそれらの属性、それらの本性、その霊の存在、それこそが、私たちが神について知り得るすべてなのです。もし私たちがこの霊を、私たちの外にある宇宙の法則の中に認知するなら、そして私たちが十分な働きをしているときにいつもこの霊を私たち自身の中に認知するなら、私たちは「神は私たちの中にあり、私たちは神の中にある」と言えるのではないのでしょうか。……これら（あらゆる神の属性、愛と叡智と力）すべてを生命の現実によって検証してみましょう。あらゆる生き物に関して、その全ての継起に関して、これらを完全に見きわめるよう努力しましょう。私たち人間だけが唯一、たとえわずかであろうと、神が見るように見ることはできるのです。それこそが「真理」なのです。³²

ことなしに神の存在を論証する手段として、イギリスの宗教文化の中に確立されたという。(同上書 205 頁)

²⁹ フェーヴル、前掲書、20-21 頁

³⁰ 「原像」(l'imaginal イマジナル) とは、アンリ・コルバン (イスラム神秘神学) の提唱する概念である。人間のもつ後天的「想像」(イメージ) よりも先見的に宇宙に在るとされる。「原像」は、見えない、奥深い「いのち」として、宇宙的霊性を肯定する。

³¹ 『真理の探究』、33 頁。ナイチンゲール看護論が「観察」を重要視することとの関連もここから予測される。

³² 『真理の探究』、342-343 頁、括弧内は引用者。

ナイチンゲールはここで、神と神の霊を区別している³³。人間は神そのものを知ることはできない。しかし遍く存在している神の霊は内にも外にも、すなわち宇宙に貫かれている法則のなかにまた私たち自身のなかに見出すことができる³⁴。それは生命の現実、あらゆる生命あるものの継起のなかに神の愛と叡智と力を見極めることでもある。それを証しすることが人間の努めであるから、“law”とは語源どおり「真理」であり「法則」を意味している。

この真理であり法則を見いだすことに際して、ナイチンゲールはコントの実証主義について広く宇宙に存在する現象に法則の現れを見出しているが、そこに留まっているという³⁵。感覚で認識された現象のみを信じていく方法の限界を述べ、同時に法則から外れた超自然的啓示に依存する方法をも否定する。奇跡を基盤とするのではなく、法則を基盤として宗教を説く——神の法則を神の福音に——という試みをナイチンゲールは提示している³⁶。神の霊によって与えられた想像力と洞察力によって、ありとあらゆる生命の現実、あらゆる生命あるものの継起のなかに日々繰り返される奇跡を見ようとしている。啓示は自然と歴史の中にそれらを通して現れるのであって、それらを超えて現れるのではない。正しく見られるならば——光に照らされるならば——、自然と歴史は神を開示する能力をもっている³⁷。これがナイチンゲールにとっての、「自然を神の目の立場でありのままに見る」ということであった。

以上、ナイチンゲールがいう自然法則の意味する内容を確認してきた。この自然法則論の延長線上に、看護論における「命の法則」「健康の法則」も位置づけられることになる。そこで最後に看護論に限定された「自然」「自然法則」へのナイチンゲールの言及をみていく。

4. 看護論における自然、自然法則

1) 自然と人間の位置関係

ここではナイチンゲール看護論のなかで「自然」がどのように使われているかを確認する。まずはナイチンゲールの言葉を取り上げる。

<病気とは>

病気や疾病とは、健康を阻害してきたいろいろな条件からくる結果や影響をとり除こうとする自然の働きの過程である。癒そうとしているのは自然であり、私たちは自然の働きを助けなければならない。³⁸

<看護とは>

内科的治療も外科的治療も障害を取り除くことができるだけで、癒すことはできません。それができるのは自然だけです。……そしてこのどちらの場合にも看護がなすべきことというのは、自然が患者にはたらきかけるのに最も良い状態に患者をおくこと

³³ ナイチンゲールの「三位一体」論が宗教学的にどのような立場をとっているのかについて、ここでは立ち入らない。

³⁴ だからといって、ナイチンゲールは自ら自分の立場は汎神論ではないと断っている。汎神論は神と一体となりその個性を喪失すると主張している（『真理の探究』、362-363頁）。

³⁵ 『真理の探究』、140-141頁

³⁶ 『真理の探究』、154-156頁

³⁷ マクグラス、前掲書、244頁

³⁸ 『ナイチンゲール著作集 第二巻』、97頁

なのです。³⁹

看護とは何か？この2つの看護（「病人の看護」と「健康への看護」）は、いずれも自然が病気や傷害を予防したり癒したりするのに最も望ましい条件に生命をおくことである。⁴⁰

以上のように、「病気」とは健康を妨げているものを取り除こうとする自然が働いている状態であり、回復に向けた修復過程である。つまり、病気というプロセスに既に自然が働いているのである。そして、病気をそのように捉えることにより、看護のなすべきことは自ずと導かれる。すなわち、自然が病気を癒すのに最も望ましい条件に生命をおくことである。

ここからわかるようにナイチンゲール看護論の原理を理解する重要概念として、自然（の働き）の存在が際立っている。自然は病気を起こし、なおかつ癒す。この一連の流れの主体は自然であり、決して看護者ではない。自然は看護を主導する原理として導入され、看護実践の場において絶えず働いているものとされる。ここでは自然は人間を超えた位置にあり、同時にその自然は人間のなかでも働いている。人間の側からいけば、人間は自然のうちにながら同時にその自然を認識することができ、自然と協働することができる。ここにはナイチンゲール独特の宗教的背景をもった自然と人間の関係がみられる。

2) 自然法則の達成という「本当の仕事」としての看護

そして前章までの確認によれば、この自然の法則に神の意志が顕われているのだった。ナイチンゲールはこの自然法則を看護現象において具体的に捉え直す。つまり、健康人と病人の両者を共に支配している健康管理の法則、すなわち看護の法則⁴¹、心の法則⁴²、神が私たちの精神を宿らせている身体を健康にも不健康にもする法則⁴³として。だから、神がこの法則を間違いなく遂行することで人間の責任も成り立っており⁴⁴、この神の法則こそ、人間がより完全なあり方を目指して進むための方法となり糧となるものに他ならない⁴⁵といい得る。

ナイチンゲールは自然の法則に神の意志を読みとるからこそ絶対の信頼をおいている。従って看護者には、この法則を拠り所に働き、自然が示すところのものをよく観察し「真実を述べる」⁴⁶ことが求められる。すなわち、「愛と叡智と力のすべてを生命の現実によって検証すること、あらゆる生き物に関して、その全ての継起に関して、これらを完全に引きわめるよう努力すること」が求められるのである。そして、それは日々の具体的な看護実践のうちで、「愛と叡智と力のすべてを生命の現実によって検証すること」を指していよう。ナイチンゲールは、看護実践にここまでの奥行きをもって「あなたの本当の仕事を行いなさい」といっていたのだ。

³⁹ 『対訳 看護覚え書』、219 頁

⁴⁰ 『ナイチンゲール著作集 第二巻』、128 頁、括弧内は引用者。

⁴¹ 『対訳 看護覚え書』、5 頁

⁴² 『対訳 看護覚え書』、9 頁

⁴³ 『対訳 看護覚え書』、9 頁

⁴⁴ 『対訳 看護覚え書』、44 頁

⁴⁵ 『対訳 看護覚え書』、45 頁

⁴⁶ 『対訳 看護覚え書』、175 頁

3) 観ることの徹底

このように神の意志の顕われである自然法則は、患者の身体のうえにも具体的に働いているのだから、看護者は患者の状態をよく観察しなければならない。ナイチンゲールは「病人の観察」について、驚嘆するほど緻密な具体性をもって説明している。例えば睡眠や食事量の正確な把握のための質問のしかた、病気に伴う患者の顔つきの変化、脈拍の質の変化から読み取れる病状の違い……（熟練看護師でもここまでの観察ができる者はいないことを、現在の看護師の多くが認めるだろう）。この徹底した具体性をめぐって、ナイチンゲールは、看護には「神秘」など全く存在せず、優れた看護というのは、すべての病人に共通することがらと個々の病人に固有のことがらを、つぶさに観察することのみで成り立っているのだという⁴⁷。

このような観ることの徹底とは、そこに神の法則——命の法則——がどのように働いているのかを読むことである。向こうからくるものを自覚的に、自分を「真空」にして（私意を離れて）受けとり、事実をその「内から」観ようとすることを指している。これが、前述した「神が意志しているように見る、神が見ているように見る」見方に近づくことである。このように観ることによって、そのものの存在（形象物としてのそのものの向こう側）がひらけてくるような観かたに通じていくのではないだろうか。

こうしてナイチンゲールの現実的に自然を観ることの徹底の背後に「照応」と「生きている自然」の思想を見ることができた。

5. おわりに

以上本論は、ナイチンゲール看護論をその宗教的神秘性と現実性とが相即するものとして解釈する立場から看護論における自然法則を理解しようと試みた。ナイチンゲール看護論において自然は看護を主導する原理であり、命の法則＝健康の法則とはその自然法則を具現化したものとして位置づけられていることを述べた。従ってナイチンゲールの宗教的立場からは「自然法則の達成」とは神の意志との一致のうちに行為することを意味し、ナイチンゲールにとっては、宗教的具体的実践がまさに看護の仕事そのものだったといえる。

ナイチンゲールは看護の要素に、「新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさなどを適切に整え、これらを活かして用いること」を挙げる。大気・太陽・暖かさ・清浄さ・静寂といった要素は、人間を癒そうと働きかける「生きている自然」であり「呼びかけてくる自然」である。看護者はその「静かにささやく声」を聞きとらなくてはならない。自然法則とは既にそこに準備され読み取られることを待っている神の言葉・声・真理であった。自然は、それを観察しそこに神の意志を識別する看護者の「本当の仕事」を待っているのだ。

（京都大学 GCOE<心が活きる教育のための国際的拠点>2011 年度研究開発コロキウム論文集 人間形成における「超越性」の問題—自己変容・ケア・関係性—（Ⅲ）、74-83 頁所収）

⁴⁷ 『対訳 看護覚え書』、193 頁。この文面から、物事（例えば病気）を共通性（一般性）と個別性の区別と連関において捉えようとするナイチンゲールの論理的な思考が読み取れる。